Bulletin of Aichi Univ. of Education, 63（Educational Sciences）, pp. 29 − 37, March, 2014

障害児・者のきょうだいを対象とした ピア支援の意義と有効性について ―グループワークを通して―

三橋 里歩* 吉岡 恒生**

*愛知県立三好養護学校
**障害児教育講座

The Meaning and Effectiveness of Peer Support for Siblings of Persons with Disabilities

Riho MITSUHASHI* and Tsuneo YOSHIOKA**

*Miyoshi Special Needs Education School
**Department of Special Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 問題および目的

家族の中に障害児・者がいることは、そのあり方に少なからず影響を与え、家族は様々なストレスを経験する。大瀧（2011）[1]は、先行研究において、障害のある兄弟・姉妹を持つきょうだい（以下「きょうだい」）は、障害のある兄弟・姉妹（以下「兄弟・姉妹」）、そして親との関係性からさまざまな葛藤、混乱、否定的な感情を抱きやすいということが明らかとなっていると述べ、その否定的影響・肯定的影響について以下のようにまとめている。

まず否定的影響については、特に兄弟・姉妹に手がかかる状況をめぐり、「親が同胞の世話をする時間が多くなり、親の注意が障害児･者に向きやすい。それによって、きょうだいは寂しさや不満を感じ、時には自分が親から拒否されていると感じ孤独感を抱いたり、同胞と親の愛情をめぐって張り合うことに対する罪悪感を抱く」ことが挙げられる。またきょうだい自身が世話や家事を課されることの影響についても指摘されており、「同胞を世話する役割を担うことで、きょうだいは自分の時間を割かなければならなくなり、憤りや不満の感情を抱いたり、きょうだいに情緒的な問題が起こりやすい」「親との関係に葛藤を感じやすくなる」「きょうだい自身の家庭外での経験時間が少なくなり、結果としてきょうだいの社会性や情緒発達に影響が及びストレスを抱える結果、心理社会的な問題につながる」などが挙げられる。

一方、肯定的影響については、「家族の中で同胞を助けるという重要な役割を果たすことで自己評価を高め、責任感を持ち、より早く成熟していくこと、寛容さや誠実さを身につけること」などが挙げられている。しかしこれらは、否定的影響や特有の悩みを乗り越え、自身の中で消化することができた末のものであり、きょうだいたちは肯定的影響よりも否定的影響を受けやすいのだと考えられる。そこで問題となるのは、本人がそれらの感情に気づいていなかったり、あるいは無意識的にそれらの感情を抑圧してしまったりしていることである。

わが国ではそのような状況に置かれているきょうだいを支援するためのグループが発足している。（平川（1986）[2]、益満･江頭（2002）[3]、藤井（2007）[4]など）その中心は当事者であるきょうだいたち自身であるために、その形態はセルフヘルプ・グループとなる場合が多い。同じ境遇のきょうだい同士のグループであることで、参加者は他人に話しづらい兄弟・姉妹のことを話すことができ、それが難しくても他のきょうだいの話を聞いて共感することによって、自分の思いの昇華・再構築が可能となると考えられる。

これまでの研究では、当事者がセルフヘルプ・グループを運営した上でその結果をまとめたものはあまりない。きょうだい自身が運営したグループをきょうだいの目線から研究することは、グループの凝集性を高める効果を持つとともに、その有効性や問題点を指摘しやすいと言えるのではないだろうか。そこで、本論では自閉症の弟を持つ筆者（三橋）がきょうだい支援の会（以下「ピア･グループ」）を運営し、参加者が抱くさまざまな思いについて活動を通して語り合い、共有していく。その上で、本活動が参加者に与えた影響をもとにピア・グループ実施の意義や有効性、ひいては今後のきょうだい支援のあり方について提言する

ことを目的とする。

2. 方法

(1) **方法**：ピア・グループ活動

(2) **対象**：障害のある兄弟・姉妹を持つきょうだい14名（筆者を含む、表1参照）

後の結果等の記述を理解しやすくするため、きょうだいとしての思いやグループ内での役割等に焦点を当てた参加者14名のプロフィールを併せて以下に記載する。これは筆者がグループ活動を通して参加者に抱いた印象やグループ内の発言をもとに記述した。

筆者：活動中は司会進行をするとともに、グループ全体の雰囲気づくりを行うファシリテーターの役割を担う。弟とは良い関係性を築いているが、カミングアウトには現在も困難を抱えているため、活動内ではネガティブな発言が多い。

A：姉とは生活の中で関わる時間が少なく、障害についても深く知らないようである。彼女は活動開始時、不登校状態にあったが、このグループには筆者と行っている個別面談（卒業研究の一環としてきょうだいの思いを聞くためのもの）の延長として参加することができた。

B：グループ内での発言回数はあまり多くないが、妹のことをとても可愛がっており、他者へのカミングアウトも積極的に行っている。Cとは高校の友人であり、活動中にもCと二人だけで会話をしていることが多い。

C：弟との関係性は良好であるが、カミングアウトには消極的であり、また将来の弟との関わりについて不安を抱えている。

D：姉の障害について詳細に理解できており、姉との関わりから将来医者になることを目指している。だが、カミングアウトについては大きな不安を抱えており、他の参加者がどのような思いを持っているのかを気にしている。

E：年の離れた妹のことを大変可愛がっている。妹については話せないことがない、と語るほど妹のことを受容している。

F：参加者のうち一人だけ医療・福祉・特別支援教育系の道を選んでいない自分のことを異質な存在と捉えており、違和感を抱いている。グループの中では別の視点からの意見を伝える役割を担う。これまでに友人に妹のことを話した経験はあまりない。

G：弟のことを積極的に友人に話しており、日常生活でも弟と関わる時間が多く生活の中心が弟であるような印象を受けるが、それ自体を楽しんでいるように思われる。兄であるIと考え方は似ているが、兄と比較すると中立的な面も持つ。

H：第4、5回にしか参加していないが、そのため本グループのことを客観的に見ている。カミングアウトは大学までしていないようであるが、弟のことを障害の有無に関わらず自分の弟には変わりないと捉えているため、その必要性を感じなかったと語る。

I：弟のことを受容し、良好な関係を築いているとともに、弟のことを積極的に友人に話している。“きょうだいの手本”となるような考え方をしており、グループの参加者たちの印象に残るような発言をすることが多い。

J：カミングアウト、将来について不安を抱えている。活動中には積極的に発言をしていて、その発言は中立的な立場からのものが多い。

K：筆者と同様、きょうだいに関する卒業研究を行っている。カミングアウトは難なくできているが、その一方でネガティブな思いも同時に抱えており、その点での葛藤が生じているようである。活動中の発言は積極的であり、他の参加者へ共感的な態度で接している。

L：現在、保育士として保育園に勤めている。姉のことを話せるようになったのは2年前からであり、未だ積極的に話すことは難しく、それは昔カミングアウトに失敗したことがトラウマとなっているからだと語る。活動中の発言は少ないが、元々集団内で話すことは得意ではないようである。

M：現在、教員として特別支援学校に勤務している。きょうだいに関する問題への関心が強く、勤務校に

表1　参加者のプロフィール

	性別	年齢	兄弟姉妹から見た参加者の属性	参加回数
筆者	女	21歳	姉	5回
A	女	14歳	妹	4回
B	女	16歳	姉	4回
C	女	16歳	姉	4回
D	男	18歳	弟	1回
E	女	18歳	姉	1回
F	男	18歳	兄	3回
G	男	18歳	兄	3回
H	女	20歳	姉	2回
I	男	20歳	兄	4回
J	女	20歳	姉	3回
K	女	21歳	妹	5回
L	男	23歳	弟	4回
M	女	24歳	姉	4回

※参加者の年齢は第1回実施時のものである。また、GとIは兄弟関係にある。なお、兄弟・姉妹の障害種は自閉症（筆者、A、B、C、D、E、G、I）、知的障害・精神発達遅滞（F、K、L）、アスペルガー症候群（H）、ダウン症（J）、高機能自閉症（M）である。

おいてもその問題に取り組もうとしている。グループ内ではお姉さん的存在であり、年少のきょうだいのモデル的役割を担っている。

(3) 手続き

2時間半で1セッションとする活動を全5回実施した。扱った活動は以下の通りである。

第1回：自己紹介、自己紹介の振り返り活動

第2回：「私の家族」をテーマとしたコラージュ（貼り絵）制作、振り返り活動

第3回：きょうだいが主役のドラマ『抱きしめたい』（NHK）を観ての語り合い、振り返り活動

第4回：「それぞれの心象風景」についての語り合い、振り返り活動

第5回：全体を通しての振り返り活動

参加者にはあらかじめ承諾書を書いてもらい、許可を得て活動中の発言をICレコーダーに録音する。考察は各回の参加者の発言内容や、各回活動終了後に記入してもらう振り返りシートをもとに行う。また、全活動終了後には数値評価を行ってもらうことで、本グループ実施の効果を考察する。

3. 結果および考察

(1) グループワークの実際と得られた結果

各回ごとに活動用のシートを用意し、シート記入後その記述内容を参加者に発表してもらい、聞き手が質問や意見を投げかける形をとった。それによって司会役の筆者が意図しなくても、きょうだいが抱えるとされる様々な話題について語り合うことができた。全回を通して最も多く話題に上ったのは、「(友人等への)カミングアウト」と「親亡き後の将来への不安」だった。そのどちらも先行研究においてきょうだいが抱えやすいとされる悩みである。

第1回（参加者11名、ABCDEIJKLM＆筆者）

11名のうち、BさんとCさん、筆者とEさん、Iくん、Jさん、Kさん、そしてLくんとMさんは現在高校や大学が同じであったり、以前にそうであったりしたため、本グループで出会う前からある程度の関係性ができていた。また、筆者は全員とあらかじめコンタクトを取った上で本活動に臨んだ。初対面となる参加者も多くいたのだが、活動中は始終笑いが絶えず、全体的に和やかな雰囲気の会となった。元々社交的な参加者が多かったとも言えるが、ピア・グループが「きょうだい限定」であることが関係しているとも考えられる。

グループ活動では、自己紹介シートに記入した上で各参加者が自己紹介を行った。この回の活動で興味深かったのは、自己紹介シートに設けた「その他（自己PRやみんなに聞いてみたいことなど)」の項目にCさん、Dくん、Lくんの3名が記入し、それに対して参加者が応答したことである。3名はいわゆるきょうだい特有の悩みを書いており、質問した内容について特に切実な思いを抱いていたと考えられる。

Cさんはきょうだいが抱きやすいとされる「親亡き後の将来への不安」と、「結婚についての不安」を語り、他の参加者に意見を求めた。Cさんは現在高校生であり、親亡き後の兄弟・姉妹への支援に関してはまだ遠い先の話であると言えるだろう。しかし、彼女はきょうだいでない友人と自分を比較して、その将来のビジョンが大きく異なっていることから、将来全般へ不安が募っているようであった。それに対して、年長の参加者たちはCさんが高校生のうちから将来のことを考えていることを賞賛し、感心した。そして、各々が思う「将来」についての考えや不安を語り、Cさんに年長のきょうだいたちも同様に悩んでいることを伝えることによって、少し近い将来のビジョンを示す役割を担った。Cさんは活動終盤に記入したシート「自己紹介をふりかえって」に「自分のように思っている方もいたりして、自分だけではなかったんだと感じました」と書いており、年長のきょうだいたちの声が届いたようだった。

Dくんの質問は「カミングアウト」(兄弟･姉妹に障害があることをどの程度の関係性になったら他人に話せるか）についてであり、これもきょうだいが悩みやすいとされる代表的な問題であった。このときには、筆者、Cさん、Dくんの3名が昔や現在あまりカミングアウトには積極的でないと語り、この後にJさんも現在は可哀相だと思われるのが嫌なのでカミングアウトを躊躇してしまうこと、Lくんもカミングアウトには消極的であったことを語った。だが、全体的には難なくカミングアウトできている参加者が多いのが本グループの特徴であった。しかしこの結果は、この会に参加している者の多くが、特別支援教育や医療、福祉系の職業に進んでいる、あるいは進む予定の者であることが関係していると言えるだろう。質問をしたDくんは他の参加者が全般にカミングアウトに積極的であることを知り、「自己紹介をふりかえって」には「みんな兄弟に障害があることを他人に結構言っていることがわかって、自分も言ってみようという気になった」と記述しており、他のきょうだいをモデルとして行動を起こすことを前向きに検討していた。

Lくんの質問は「恋愛と結婚について」であったが、これにもカミングアウトの問題が絡んでくることが参加者たちの語りから明らかとなった。きょうだいたちは恋人や結婚相手に自分の兄弟・姉妹のことを理解してもらいたいと望んでいるが、「どうせわかってもらえない」という思いを抱えてしまいやすいことがわかった。多くのきょうだいにとっては、結婚以前の恋愛においても兄弟・姉妹のことが大きな影響を与えているようである。

第2回（参加者8名、BCFGKLM＆筆者）

「私の家族」をテーマとして参加者にコラージュを作成してもらった。コラージュは参加者が雑誌や広告から自分で選んで貼る「マガジン・ピクチャー・コラージュ方式」で行った。制作時間は70分間とし、製作中の参加者同士の雑談は参加者の自由にゆだねた。

製作中には、座席が友人や同年代同士で固まってしまっていたため、友人同士で会話をしながら制作をする時間が多くなってしまった。制作を開始して数分でパーツを切り取る参加者もいたが、多くはパーツを選ぶ作業に時間がかかった。

制作終了後には各々が自分の作品の説明をし、聞き手がそれに対しての質問をした。質問は一人につき2問から4問なされ、パーツのより詳しい説明や意図を求めるものが多かった。今回の活動ではきょうだいであることを意識した質問は出なかった。

Gくんの作品は「うちは弟を中心に回っているので」という本人の語りを裏付けるように、弟に関するパーツが多いものとなっていた。しかし、自分の作品の説明をするGくんからは楽しそうな印象を受け、弟が中心である今の生活が充実したものであることがうかがえた。また、第1回で将来の不安を語ったCさんの作品には未来を表すパーツが貼られており、Cさんにとって今は将来を考える時期であることが推測された。

第3回（参加者7名、AFIJKM＆筆者）

第3回となったが、初対面となる参加者の組合せがあったので、今回も語り合いの前に簡単な自己紹介の時間を設けた。そうすると、これまでよりも参加者同士が打ち解けてきたことが要因となったのか、最近のエピソードを交えて、自ら兄弟・姉妹のことを説明する参加者が半数以上いた。

活動はドラマ『抱きしめたい』を鑑賞して、印象に残ったシーンやそれに関して参加者に聞いてみたいことを各参加者が発表し、それについて語り合うことが主となった。

以下、NHKのHPから「あらすじ」を転載する。

夏の始まり。未来子は、恋人・祐治にプロポーズされ戸惑う。未来子には祐治にどうしても言えずにいることがあった。5つ違いの弟・道朗は、自閉症なのだ。話しかけてもオウム返しをして会話が続かない。目を合わせない、ときにパニックを起こす。「かわいそうに。未来子は一生お嫁にいけないねぇ」___

子供の頃、祖母に言われた言葉が未来子の頭にこびりついていた。

祐治と結婚したい、でも弟のことを言うのが怖い……。思い悩んだ未来子は突然、ふだん疎遠にしている父と母を道朗とともに旅行に連れ出す。行き先は、弟が大好きな石原裕次郎の記念館がある小樽。一家にとっては16年ぶりの家族旅行だ。

実は、未来子にとっては大きな賭けだった。事情を知らない祐治を小樽に呼び出し家族と合わせてしまえば自分で弟の事を告白せざるを得なくなる。もう逃げられない……。

果たして一家は無事小樽に辿りつけるか？そして未来子の告白と結婚の行方は？

ドラマの中で、主人公が恋人に弟の障害をカミングアウトしたとき、「そっか」と言った恋人の反応に主人公が怒った場面が印象に残った筆者は、「主人公は『そっか、で済まさないで！』って怒ったじゃないですか。でも、結局何て言ってもらえたら自分はすっきりするのかがわからなくて……。みんなだったら何て言ってほしいですか？」と参加者に語りかける。

しかし、Jさんからは「相手からしたらそれが限界」、Fくんからは「『そっか』って言う以外ない」など、主人公の怒りに共感する発言も、理想的な恋人の反応を示唆する発言もなかった。筆者は他の参加者も主人公の気持ちにきっと共感しているだろうと考えて質問をしたのだが、結果として筆者以外はそうではなかった。きょうだいであればきっと同じように考える人が居るはずだと思って質問をしただけに、自分がずれているのだとわかった瞬間はショックを受けた。同じ境遇のきょうだいであっても、やはり共感する部分や悩みは異なることが明らかとなった。

次に、婚約者へのカミングアウトが話題になったことに関連して、Iくんから「カミングアウトするときに抵抗があるっていうのが全然わからない」という問いかけがある。筆者が挙手を求めたところ、「抵抗があった」が2名、「抵抗がなかった」が4名、「どちらとも言えない」が1名であった。

「抵抗があった」と答えたFくんの語りは以下の通りである。「やっぱり何を言われるかわからないっていうのが（怖い）。（妹のことを）言って、『えー。』って言われても、それは妹への評価なんで……自分は自分、妹は妹っていう風に育ってきたんですけど、自分がどう思われるか、たぶんあまり思われないんでしょうけど、それ（本当に相手が何とも思わないのか）が100％ではないので怖かったのかな。普通の目で見てくれなくなるのかなって、かわいそうって思われるのかなって、そういうのがあったのかもしれません。」（（　）内は筆者の補足）

一方Iくんは、幼い頃も現在も弟の障害のことを恥ずかしいとは思わず、「わかってくれる人がいないともっと厳しい目で見られる」ので、むしろみんなに知ってもらいたいと考えている。そのためカミングアウトに消極的である参加者の気持ちを知りたくて質問をしたようであった。本グループでは、第1回の結果でも述べたように、カミングアウトに積極的である参

加者が多いが、その一方でFくんのように相手の反応を気にして消極的になってしまう者もいるというのがきょうだいの実情であるだろう。

この回で意見が激しく衝突したのは、Kさんが言った「どうせわかってもらえない」「わからないくせに」という言葉が発端になって始まった以下のやり取りであった。きょうだいでない人に自分の姉のことを話すことはあっても、本当に理解してもらえるわけではないという意味の発言だったが、それに対してIくんは「『わからないくせに』じゃなくて、なぜわかってもらおうとしないんですか」と反論した。Iくんは参加者の中で最も啓発的な考えを持っているため、きょうだい自らが発信していかなければ状況は変わらないと訴えた。Iくんの意見は正論であるだろうが、Kさんは「あなたたちにはわからないでしょ」と言うことによって自分を守っているのかもしれないと語り、そうせざるを得ない状況に置かれてしまうきょうだいたちの思いを代弁しているかのように筆者は受け取った。この衝突は緊迫感のある語り合いとなったが、双方に新たな視点を生むという結果をもたらした。

活動後に記述した「ドラマ鑑賞をふりかえって」シートには、本人を除いた6名の内5名がIくんの上記の発言が印象に残ったと書いていた。そのほとんどが「気付かされた」「勉強になった」といったポジティブな印象を抱いていた一方で、Jさんは「Iくんの意見を聞いて、自分が動かなきゃという思いと、言って伝わるかな？という思いで葛藤した」と書いていた。Iくんの意見が正論であることはわかっても、それを行動に移しづらい現状がJさんにはあるようだ。

第4回（参加者9名、ABCGHIKL＆筆者）

「それぞれの心象風景」シートは、「あなたが記憶している、障害のある兄弟・姉妹との一番古い思い出はどんなものですか」「神様がもし『3つの願い』を叶えてくれるとしたら、何を願いますか」「あなたは癌で余命一年と医師に告知されました。これから一年どのように生きていきたいですか」「あなたにとって『幸福』とは何ですか」という4つの質問項目から成っている。今回の活動では、各自シートに記入した後、各々が各項目について発表をしていった。発表内容に対し参加者が質疑応答し、興味深い話題については筆者が司会役として展開させたりした。

「兄弟・姉妹との一番古い記憶」に関してBさんが発表した内容がきっかけとなり、各自が兄弟・姉妹の障害を認識した時期について語り合った。その時期には大きくばらつきがあり、また親の対応もさまざまであることがわかった。

Bさんは、保育園に通っていた4歳の頃、友達の弟妹が2歳違いで入ってきて、その子たちと遊んでいるとき、「あっ、自分の妹と違うな」と気づいたと言う。しかし、「これは親に言っちゃいけないことだ」と思ったから、福祉系の高校に入って自閉症について学び始めてやっと、母親に妹の障害について尋ねることができたと語っている。この語りに共感する声が多く聞かれたことから、きょうだいにとって兄弟・姉妹の障害について親に聞くことはタブーであると感じるきょうだいが多いことがわかった。

一方、Gくん・Iくん兄弟や筆者の場合、親に説明されて小学生のうちに兄弟・姉妹の障害について知っていた。また、「気づいたらおねえちゃんが自閉症だってことがわかってた」というAさんのような例もあった。その背景には、今回の参加者全員の家庭にあるという『光とともに……』などの漫画の影響もあるだろう。

母親たちが記入した「それぞれの心象風景」

第4回の活動終了後、参加者が活動中に記入したものと同様の「それぞれの心象風景」シートを参加者の保護者向けに配布し、参加者から保護者に渡すよう依頼した。これは参加者と保護者の間での「心象風景」の共通点や相違点を見るだけでなく、保護者と参加者が兄弟・姉妹に関わる過去の出来事を振り返ったり、将来について話したりするきっかけとなることをねらいとした。保護者には「それぞれの心象風景」のシートに加えて、「きょうだい児グループに参加してくださっている方のおかあさま・おとうさまへ」という手紙も添え、これは強制ではなく賛同していただければ第5回のグループ活動の際にシートを参加者に預けてほしいという旨を記載した。その結果、第4回参加者は9名であるが、GくんとIくんは兄弟であるので、8家族中7家族からの提出があった。回答者はいずれも母親であった。以下、シートの回答を踏まえて、3つのテーマについて検討する。

まず、1点目は母親たちに共通した思いである。母親7名中、シートの自由記述のどこか1箇所にでも「健康」という文字を書いた人は6名いた。どの母親も自分の健康だけでなく、家族全員の健康を願ったり、その状態が幸福であると記述したりしている。一方、グループの参加者の中で「健康」と書いたのは1人だけであり、母親と子どもの間での大きな差異である。これは、家族を守る立場としての母親らしさが表現されていると言えるだろう。だが、単にそれだけではなく、障害のある子どもを持つ親としての強い思いがそこに込められているのではないかとも筆者は推測する。誤解を恐れずに言えば、障害があることは真に健康な状態であるとは言い難い。だからこそ、母親たちは「健康」というものを一層大切に考える傾向にあるのではないだろうか。

2点目は参加者と母親の回答の一致点、類似点についてである。参加者と母親の回答をペアとして見る

と、類似した記述が見受けられるものや、一致しているものがあることがわかった。

Ａさんの母親は「参加者と兄弟・姉妹のかかわりで記憶している一番古い思い出」について、「私が障害のある姉に手をあげた時、妹（Ａさん）が私を叱ったこと。『お母さんがそんなに怒るから泣くんだよ』と姉をかばって言った」と書いている。Ａさんはこれと同様の思い出を第3回の活動内で語ったことがある。母親にとっても、Ａさんにとっても、この出来事は忘れられないものとなっていることがわかる。

Ａさんと母親と同様に、筆者と母親も共通の出来事を記憶していた。筆者は、「弟との一番古い記憶」として、「自分が小3のときに、弟を連れて初めて二人で下校したこと。でも、母親に言わずに内緒で帰ったのでとても叱られた」と書いた。これに対し、筆者の母親は「姉が小学校3年生、息子が1年生。放課後迎えに行って、先生としゃべっていて気がつくと2人の姿がなく、慌てて追いかけて学校からかなりの距離のところで発見し、無事で、肝を冷やした事がある（姉は褒められると思っていたようですが）」と同じ内容を書いていた。この事件は筆者と母親双方にとって印象深い出来事のようであった。

Ｂさんと母親、Ｋさんと母親も、「一番古い記憶」の時期が一致していた。その他の参加者とその母親は、それぞれ楽しかった記憶を書いているが、そこには共通点が見られなかった。一方、Ａさん、筆者、Ｂさん、Ｋさんそれぞれと、その母親との回答の一致点、類似点に焦点を当てると、そこではいずれもネガティブな感情が喚起されており、ネガティブな出来事のほうが共通の記憶として想起されやすいと考えられる。

3点目は参加者の思いと母親の回答の相違点についてである。本グループの活動中に話し合われたテーマに「親亡き後の将来への不安」がある。このテーマはきょうだいにとって避けては通れない問題であり、はっきりとではないが、親亡き後の兄弟・姉妹との生活について考えている参加者が多かった。本グループの参加者では、親亡き後に兄弟・姉妹と「共に暮らしていきたい」と考える者が数名おり、筆者もその一人である。だが、母親たちの回答を見ると、参加者の思いとは異なるものがあった。シートの質問項目に、「余命一年を宣告されたらどう生きていきたいか」を尋ねるものがある。そこにＢさんの母親は「妹の今後の人生のあり方（グループホームなど）を、姉に負担がかかりすぎないように考えたい」と書いていた。本グループの参加者の中では「親が考えるほど、私たちは兄弟・姉妹のことを負担とは考えていない」という意見が大勢を占めていたのだが、やはり母親の中には、兄弟・姉妹のことを任せられることをきょうだいは負担に感じるだろうと考える人もいる。また、「神様への三つの願い」について、筆者の母親は「親が先に死ぬという事は前提だけれど、できれば息子と一緒に最期を迎えたいと思う」と書いている。筆者としては親亡き後にはぜひ弟と一緒に暮らしたいと考えていたので、母がこのように書いていたことに驚いた。筆者の母親の記述からも、やはりきょうだいに負担をかけたくないという母親の思いが感じられる。

第5回（参加者12名、ABCFGHIJKLM＆筆者）

この回は最終回ということで、これまでの振り返り活動を行った。参加者には「全体をふりかえって（感想）」シートを配り、「印象に残った回」「グループ活動における気づき」「活動参加前と参加後での心境の変化」「参加者全員が『きょうだい』であったこと」の4項目について自由記述してもらった。

「印象に残った回」として挙げたのは、第4回（それぞれの心象風景）が5名、第1回（自己紹介）と第3回（ドラマ鑑賞）がそれぞれ3名、第2回（コラージュ）が1名だった。第4回を挙げたＣさんは「きょうだいの中でもさまざまな考えがあって思いもあるということがわかり、また、共感できる部分もあったので全体的に印象に残っています」と書いている。第1回を挙げたＭさんは、「自己紹介の中で受け入れてもらえること、共感してもらえることに対して、本当に嬉しかったことを覚えています」と書いている。Ｉくんとの間で意見の衝突があったＫさんだが、「これをきっかけに深い話ができた気がします。ドラマに出ている人が考えていることを、きょうだいみんな同じように思っているわけでもない、ということも印象に残っています」と第3回を挙げている。以上の記述からわかるように、参加者のほとんどが「印象に残った回」を選んだ際に指標としたのは、「共感する部分があったか」、もしくはその反対で「自分とは違う考えや思いに出会えたか」ということであった。

「参加者全員が『きょうだい』であったこと」についての感想にはほとんどの参加者が「やはり“きょうだい”だからわかり合えることもあると思うので、気兼ねなくしゃべることができた」などとポジティブな感想を書いていた。

また、参加者には「全体をふりかえって（評価）」シートを配布し、グループ活動や自分自身について数値評価（15の質問項目）を実施した。数値は1～7点の範囲とし、高得点ほど高評価となっている。ただし筆者の評価は客観性に欠けるため、また参加した回数が2回以下の参加者の評価については、評価材料が他の参加者に比べて乏しく信頼性にかけるため除くこととしたので、全10名分の結果を検討した。（表2）

各質問項目の平均点を見ると、「自分に関すること」（「活動内では自分の意見をうまく伝えることができましたか（平均点5.5点）」など）「将来に関すること」（「兄弟・姉妹のことを含め、今後の自分の課題につい

表2　全体をふりかえって（評価）

	平均点
1.　各回のグループ活動には意欲的に参加しましたか。	6.2
2.　活動内では自分の意見をうまく伝えることができましたか。	5.5
3.　自分の感情を表出することができましたか。	5.6
4.　グループの雰囲気はどうでしたか。	6.8
5.　グループ活動の内容はどうでしたか。	6.1
6.　参加者全員が「きょうだい」であることは、自分の意見を伝える上で効果があったと思いますか。	6.7
7.　グループの活動によって充実感を得られましたか。	6.6
8.　きょうだいたちの多様な考え方を学ぶことができましたか。	6.5
9.　兄弟・姉妹のことを含め、今後の自分の課題について心の準備ができましたか。	5.2
10.　自分の生き方を肯定的に見直すことができましたか。	5.3
11.　他のきょうだいの経験をモデルとして、自分も挑戦してみようという気持ちになれましたか。	5.5
12.　自分が生きてきた中で得られた知恵をグループで共有することができたと思いますか。	5.3
13.　グループ活動に参加して、兄弟・姉妹への思いに変化はありましたか。	5.8
14.　今回のような、きょうだいのための活動は必要だと思いますか。	6.5
15.　グループ活動に参加してよかったと思いますか。	6.9

て心の準備ができましたか（平均点5.2点）」など）は低得点を示した。これは本活動を通して他のきょうだいたちの意見を聞いた結果、思いの揺れが生じたことが要因として挙げられる。しかし、その一方で「グループに関すること」は高得点を示し、最高点を得たのは「グループ活動に参加してよかったと思いますか」の項目であり、参加者の平均点は7点満点で6.9点であった。このことから参加者たちは本グループに参加することを有意義に感じていたと考えることができるだろう。

(2) 個人内の変化から見るピア・グループ活動の意義と有効性

次に、特徴的な変化が見られた参加者についての考察を行いたい。活動開始時不登校であったＡさんについても大きな変化を示したが、筆者との継続的な個別面談がグループ活動と同等かあるいはそれ以上に影響を及ぼしていると考えられるため、今回の論考では割愛する。

Ｂさん（第1回、第2回、第4回、第5回参加）

第1、2回では自発的な発言が少なく、他の参加者が話しているときに俯いていることもあり、グループ活動に消極的である印象を筆者は受けていた。しかし、第4、5回においては参加者の話に対して共感的姿勢を示し、自発的な発言も何度かあり変化が感じられた。彼女は第5回の全体振り返りの活動で、「きょうだいの人たちと話したりすることがこれまでなかったので、色々な思いとか意見が聞けて、毎週集まりが楽しみになっていました。金曜日が終わると（グループは土曜日に実施）、『あ、明日はあれだ！』って思っていました」と笑顔で語った。これは参加者たちと思いを共有する経験が影響したものと考えられる。また、「（各回の活動が）終わってからいつも（母）親が、『今日何話したの？』って聞いてきて、コミュニケーションの基になっていました。（その回が）終わるとまた次楽しみだなって思っていました」とも語った。これまで母親と妹の障害について話す機会が少なかったという彼女にとって、本グループは母親との間をつなぐ役割を担っていたことがわかる。本活動内で参加者と語り合うだけでなく、母親との関係性にも変化が生じたことから、Ｂさんは本活動を有意義なものと感じたようである。ピア・グループがきょうだいと母親の思いをつなぐ可能性も持っているということがＢさんの変化から明らかとなった。

Ｃさん（第1回、第2回、第4回、第5回参加）

Ｃさんが第1回で「親亡き後の将来への不安」「結婚についての不安」について参加者たちに質問を投げかけた際、グループ最年長のＭさんはＣさんの年齢においてすでに将来を意識していることに感心する一方で、現在の自分の年齢になっても不安や心配が尽きないことを語った。これは一見年少のきょうだいのモデル的役割を担う年長のきょうだいが不安を語ることで、かえって不安を増幅させてしまうように思われる。しかし、Ｃさんは「自分のように思っている方もいて、自分だけではなかったんだと感じた」と活動後の振り返りシートに記述しており、また第5回時には将来について「なんとかなる」と発言した。このことから年長

のきょうだいであっても将来について悩んでいることを知り、将来のビジョンが少し見えたことで安心感を抱いたことがわかる。これは“ピア”でなければ分かち合えないものであり、きょうだいであるＭさんの語りでなければＣさんが抱いた安心感は生じなかったと考えられ、この点がピア・グループの意義、有効性へとつながると言えるだろう。

Ｆくん（第2回、第3回、第5回参加）

本グループ活動の参加者の中では、中学生のＡさんを除いて、彼だけが医療・福祉・特別支援教育系の道を選択していない。そのため、上記の進路を選んだ者たちよりもＦくんは妹に対してネガティブな思いを抱いていたが、兄弟・姉妹のことをポジティブに捉えている者が多い本グループ内ではその思いを抑圧してしまっていた。そのことは、各回の振り返りシートの記述からもわかる。彼は第5回「全体をふりかえって（感想）」シートにおいて、「きょうだいと接することがほとんどなかったので、きょうだいの話を聞いて自分も変わっていかなければな、と思った」と書く一方で、「ただ、障害児教育に関係している人が多い中、畑違いの自分が浮いている気もしました」とも書いている。このことから、彼は他の参加者と自分を比較して自ら「変わりたい」と思うのではなく、多数派の意見が正しいと思うあまり「変わらなければならない」と思い込んでしまったのだとも考えられる。このような気持ちを抱いたことも変化とみなすことができるかもしれないが、半ば強制的にそうなってしまったとも考えられるので、ファシリテーターである筆者の配慮不足を反省しなければならない。しかし、そうした思いが彼にとってプラスの効果を及ぼさなかったとは言い難い。彼は第3回実施時の振り返りシートに、「私は他の人たちと違って、あまり障害のある子と接したことがないので、そういう子たちの実際の姿を見てみること、接することも必要で、それに伴い自分の考え方も変化するのかなと思った」と書き、その後、実際に妹の通う特別支援学校の文化祭に初めて行ったことを第5回実施時に参加者たちに報告した。「変わらなければならない」という気持ちを抱くだけではなく実際に行動を起こしたことから、彼の中で「変わりたい」という思いも芽生えていたと考えられる。

Ｉくん（第1回、第3回、第4回、第5回参加）

第1回、第3回では、カミングアウトに消極的な参加者に対して、「自分は～思っているのだが、なぜみんなはそうしないのか！」と強い口調で自分の思いを語る姿があった。だが、第3回のＫさんとの意見の衝突を経て、それ以後の活動では参加者の語りに対して共感的な相槌を打つ姿が多く見られるようになっていった。Ｉくんは前半で他者と意見がぶつかる体験をしたことで、後半では自分の考えとの相違があってもそれを認め、新たな見方として自分に取り入れていこうと考えたのだと推測される。彼自身も「全体をふりかえって（評価）」シートの感想欄に、「意見を交流することで、自分とは違う見方があることに気づけた。今までの自分の見方だけでなく、他の見方も取り入れた上でこれからも行動していこうと思えた」と書いている。吉川（2001）[5]は「きょうだいが違いをどう認め、共有し共感することができるかが直接的援助の鍵になってくる」と述べている。Ｉくんにとって本活動はこの点において有効に作用したと考えることができる。

Ｊさん（第1回、第3回、第5回参加）

彼女の変化としては、グループ活動に参加したことで、かえって将来への不安感が強まってしまったことが挙げられる。「全体をふりかえって（感想）」シートには「将来、自分から兄弟・姉妹と暮らしていきたいという人が多かった。私も大学に来るまではその思いが強かったが、最近は自分の将来と照らし合わせると、どうしていこうかと悩むことが増えた。グループ活動で（他の参加者の意見を聞くと）、やはり一緒に生活していくことがベストなんだろうなとも思いました」と心境の変化について書いている。また、「全体をふりかえって（評価）」の数値評価においては、「兄弟・姉妹のことを含め、今後の自分の課題について心の準備ができましたか」という問いに対して、最低点である1点をつけている。大学卒業後の進路を考える時期とこの活動の時期が重なっていたことも彼女が不安を抱いた要因の一つであるだろう。しかし、彼女の「心境の変化」の記述から推測すると、グループで話し合われた多数派の考え方がどうしてもきょうだいとしての模範解答のように感じられてしまうこともその要因として考えられるだろう。

(3) ファシリテーターに求められること

本グループでは当事者である筆者がファシリテーターとなり、グループの運営や活動を進めていった。その中での筆者の反省を踏まえ、ファシリテーターに必要な条件や資質がどういうものであるかについて提言したい。

まず、ファシリテーターには中立性が求められる。筆者はグループ活動の際、どちらかと言えば、きょうだいであることについてのネガティブな思いに寄り添う立場から話すことが多かったように思う。本グループではカミングアウトに関して積極的である参加者が多かったため、筆者自身、自分とは異なる考え方の参加者たちに対して感情的になって話してしまうことや、筆者が進行役であるために語り合いの方向性に偏りを生じさせてしまう場面もあった。進行役を務める者がどちらかの意見に肩入れしてしまうと円滑な語り

合いを行うことは難しい。そのため、中立性を保つことはファシリテーターにとって必要な条件と言えるだろう。

しかしその一方で、場合によっては中立性を崩すことも必要となってくることがある。本グループの活動内で、意見の異なる参加者同士が相反する意見を闘わせる場面があった。そのとき筆者は、話の流れから劣勢であった参加者を擁護するために、あえて中立性を破ってその参加者の意見に同調した。ともすれば筆者が擁護することで優勢、劣勢が逆転してしまい、今度はもう一方の参加者が劣勢になってしまうことも考えられるのだが、その点においては参加者のキャラクターから心配はないと判断したため、筆者はこのように対応した。本グループでは「共感」「共有」を大切にしていた。誰か一人が苦しい思いをしたまま放置されてしまうことを避けねばならなかったので、筆者は意図的に中立性を崩した。このように、ファシリテーターは、その状況を適切に判断した上で、場合によっては参加者を守るために中立的な立場をあえて取らないという選択肢も取りうると筆者は考える。

グループ内の関係性や心の動きに繊細にアンテナをめぐらせるなど、ファシリテーターにはグループ状況を適切に判断して行動できる集団心理療法家としての力量が求められると言えるだろう。筆者は司会役を務める際、発言の少ない参加者に対しての配慮が充分でなく、積極的に話す参加者中心に話を進めてしまっていることが多かったように思う。こうした点を正すためにも、ファシリテーターには、話の流れを読んだ上でさらに展開させていく技術、まだ積極的に話すことができないでいる参加者へのタイミングを見計らった促しなど、グループワークを円滑に運営していくための基本的な技能を習得していくことが望まれる。

4. 今後の課題

本研究から導き出された課題を3点挙げたい。

1点目はピア･グループを組織する場合、各参加者がグループに求めるものをある程度一致させていく必要性についてである。より共感性が高く自助的なグループを組織するためには年代、進路、目的などの共通点を増やし、凝集性の高いグループとすることが求められる。一方で、「自分とは違う考えや思いに出会えたか」という点もグループワークにおいて大切な要素になることを考えると、共通点のみで集まるグループの弱点も考慮に入れねばならない。

2点目は、今回の検討では省いたが、Aさんに対する個別面談、グループワークから、不登校や何らかの心理的不安を抱える「きょうだい」を他の「きょうだい」が支える可能性が見出せたことである。様々な事例の検討を重ねていくことで、その有効性、さらには効果的な支援方法を明らかにしていくことが今後の課題となるであろう。

3点目は、本当に支援が必要であるきょうだいにはそれが行き届きにくいことである。本グループには不登校状態にあるAさんや妹へのネガティブな思いを抱くFくんが参加したが、このようなケースは少数派であると推測される。兄弟・姉妹にポジティブな思いを抱く参加者が多いグループでは、兄弟・姉妹に対するネガティブな思いを分かち合えずに抑圧してしまうことが予想される。Fくんが抱いているようなネガティブなイメージをグループ内で共感的に共有し、その思いを昇華していくことこそが望まれる「きょうだい支援」であろう。いかにして本当に支援の必要なきょうだいがそれにアクセスしやすい環境を整えられるかが重要であると言える。

5. 引用・参考文献

[1] 大瀧玲子，発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観―きょうだいが担う役割の取得に注目して―，東京大学大学院教育学研究科紀要，51，2011，235-243

[2] 平川忠敏，障害児の同胞，幼年教育研究年報　11，広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設，1986，65-72

[3] 益満成美・江頭幸晴，障害児のきょうだいにおける否定的感情表出の困難さについて，鹿児島大学法文学部人文学科論集 55，2002，1-13

[4] 藤井和枝，障害児者のきょうだいに対する支援（2）―きょうだい同士の支援―，人間環境学会紀要　7，関東学院大学，2007，17-33

[5] 吉川かおり，障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性―セルフヘルプ・グループの意義―，東洋大学社会学部紀要，第39-3号，2001，105-118

（2013年9月19日受理）